

土筆

第52号

土筆集

前橋 竹内 友子

林間の崖に垂れたる藤長き
雛芥子の空き地に群れて咲きにけり
燦々と木香薔薇の黄色かな

高崎 天田 利子

渦巻きをほどきて薔薇の満開に
若葉雨うぶ毛に小さき水の玉
重なりて雫ころがす若葉かな

高崎 福田 信子

来月に続く楽しみ青梅見る
散りしより手入れ始まる薔薇の花
蔓薔薇に千の蕾の友のあり

高崎 松島 律子

青梅を逆の光がしかと見し
将来のあるよろこびや今年竹
どくだみの白き翼や地を走り

藤岡 細谷 志帆

偶然も運も味方に蟻地獄
よみがへる気力充実緑陰に
いつせひに十葉の顔朝日向く

藤岡 岸 まり子

噴煙にとどまるローマ花曇り
藤蔓の垣根を越えて隣家まで
山つつじ見上げて色のふりそそぐ

沼田 林 昭風

アカシアの咲く道甘き香りかな
外出はどこへ行くにも夏帽子
紫陽花の影の揺らめく水面かな

前橋 矢沢 春子

若竹は親竹越えて遅しく
青芝に犬になりたき我が心
青空を指して延びゆく今年竹

大垣 伊藤 弥生

しろじろと花梔子や比丘尼寺
初咲きのぎぼし遺影に読む心経
青紫蘇のかを指先に朝の膳

安中 唯野 千代

落城の悲話を抱きし茂りかな
滴の星降るごとく幾重にも
薬草を育ててをりし木下闇

高崎 門倉 博子

頬そめてみし青梅を手にとりて
夏草を踏んで後へとつづきけり
若竹の空のすき間を探し当て

前橋 成田 圭子

緑陰の日の斑を膝に遊ばせて
水になり草になりつつ糸蜻蛉
森渡る風の守唄ハンモック

前橋 相沢 富子

尽きる事なき万緑の縫ふ山路
山にまで付きまとひ来しむしあつさ
水輪ある処必ず水馬

前橋 鈴木恵三郎

わびしさの涯なむ径の花卯木
風おちしとき卯の花の匂ひけり
葉桜の濃き香に沈む詩碑の声

前橋 鈴木 幸江

夏霞街ゆくひとを包みけり
木洩日や点描日傘姉妹かな
かげりなき乙女ら笑ふ花水木

前橋 鈴木 令女

あれこれと心乱れて明易し
突然の病の知らせ五月闇
天を突く幹の頂棕櫚の花

前橋 高草木君女

葉に座り出で虫の聞く立話
家族やな目高小川行く
野や山を渡りし緑風頬にふる

前橋 高橋テル女

水滴のひかる白皿さくらんぼ
トンネルを抜け万緑の山に入る
十葉のさえし白はな夕まぐれ

昭和 花岡 京子

万緑にかこまれてゐる山の黙
列車待つ五月の風が吹き抜ける
山肌の花あかしあの香り満つ

藤岡 小田 満義

一寸の道より出でず蟻の列
あまがへる跳ねこそばゆし掌
切り返す空たそがれて燕の子

藤岡 白石 敏枝

夏潮の白き飛沫の一夜旅
汗をして前座芸人体当たり
沙羅双樹思ひ出話の姉優し

藤岡 木下 薫

若楓微かな音を大きくし
アカシアの花に食材談義かな
背水の陣を敷きたる諸葛菜

高崎 湧井 久恵
梅雨茸の絵本の如し鮮やかに
木下闇虫の世界と憩ひの場
大夏木佇む人の入れ替はり

高崎 小林かな
万緑の匂ひの中の露天風呂
身体中ぐずってをりし梅雨の日々
憂さ飛ばし真赤なグラスアイスティー

高崎 浅田 祥子
花樽こぼれて咲きし蒼き空
梅の木の小枝に残る実の一つ
気合入れ落とす実梅を拾ひけり

高崎 吉田 鈴江
クレイン伸び銜う夏空真あらたし
浮き草の流れ漂ふ微塵かな
蛇退さる形状記憶そのままに

高崎 中里見 楳
万緑や白寿の叔母にあやかりぬ
さくらんぼ両手のポーズ三歳児
緑陰に入り思ひきり深呼吸

高崎 田口 莉子
噴水のとどかぬ夢を天空に
純潔を日に誇りたる花茨
木影たけ風の集まる夏日中

前橋 角田 房枝
風の日の影をとどめぬ若楓
考へる角度に日傘傾きぬ
五月闇遠くに佐渡の漁火か

伊勢崎 青山 麻子
ひそやかに老樹は苔の花纏ふ
片陰や背にありがたき余り風
身に余るもの懸命に蟻は曳く

伊勢崎 大澤 和世
梅雨晴間植木の手入れ余念なく
苔の花見事茶色の光満つ
緑陰に目立つ大輪濃紫

伊勢崎 柿沼よしの
雪の下小さき池に石垣に
十葉の嫌はれつつも花可憐
熟したる実梅転がる二つ三つ

伊勢崎 笠原 公子
流らふる雲と睦めり合歡の花
薄ら日や花合歡憂ひ引き寄せて
花合歡の淡き紅いる夢のいろ

伊勢崎 小林喜代子
蜘蛛の囿の大きく張って孤独なる
雨に染む寺領明るき濃紫陽花
七変化寺領無情に咲きて散る

伊勢崎 小峰 史子
木洩れ日に浮きては消える梅雨の蝶
寺大樹影にひそみし苔の花
ゆるやかに高さ違へて合歡の花

太田 酒井美恵子
蟻穴の中の世界に想ひ馳せ
獲物曳き巢穴に向かひ急ぐ蟻
蜘蛛の囿の中でゆっくり獲物待ち

太田 高橋 和枝
雨上がりあせた紫陽花彩りに
梅雨晴間雑草だけが生き生きと
葉の上にダイヤに勝る梅雨霽

高崎 並木 秋野
不器用の無心に遠く飛ぶ草矢
鮎解禁野宿の車より目覚め
闇抜けて真闇に向かふ初蛩

高崎 佐藤 静子
角度変え実梅ある場所探し当て
踏ん張って体重支え実梅もぐ
人の波じつと見つめて四葩かな

前橋 鈴木 涼美
四隅だけ母の手植糸や田植糸終ふ
眩しさに紛れて仕舞ふ糸蜻蛉
全身に命の泥を田植糸終ふ

前橋 山本 素竹
山映す山からの水苗を継ぐ
木洩れ日の揺れをただ見てみて涼し
夕茜空より消えて蛩の火

前橋 伊藤 凉志
翡翠を枝へと返す水飛沫
雨蛙鳴いて無数となる水輪
力抜く枝入れる枝実梅もぐ

投句募集

土筆集は、あくまで皆様の作品の発表の場です。
日頃作った作品の中から、ご自分の好きな句を発
表してみたいかがでしょうか。

投句 三句 葉書、メール、ファックス
締切 毎月末まで 事務局

〒371-0811 前橋市朝倉町三一五一三十七

027-261-2297 Fax 027-261-2298

メール tukusi@clay-kotobuki.co.jp

ご協力御礼

六月分

群馬の森俳句会様 八千円

ご協力有り難く感謝申し上げます。

素竹一言

五十一号より

日脚伸ぶ夕日がつなぐ街あかり
夕日がつなぐ街あかり…とは詩的情緒に溢れた表現。美しい光景ですね。日が伸びてきていることを「夕日」に実感する作者です。

天道虫 転びさうなる番ひかな
どちらかといえば人に好かれる天道虫。形も模様もかわいらしいですね。この句は二匹です。「転びさう…」とまあ愛らしい表現、様子が目に浮かびます。

同じ波再びは来ず春惜しむ
サーフィンなどやられているのでしょうか。波に対する強い思いが感じられます。季節によって違う「波」と、それを惜しむ心。山育ちの私には「海」は憧れです。
藤房の水に映りてゆれにけり
風のなく、揺れない藤房を見ていた作者。ふと水面に目を映すと、緩やかな漣に藤房が揺れています。省略の利いた単純な表現に好感を持ちました。

色変りつつ朴の花まだ香る
この「色変りつつ…」とはさびて朽ちてゆく色。目に見えるものと、鼻で感じるものの違いに心動かされた作者。豊かな自然と、その不思議を感じます。

母の日や片身に袖を通しけり
季節の「母の日」が多くを語っています。

母が亡くなって暫くの月日を置いた母の日。そこそこの気持の整理のついた作者が想像できます。

葉桜の影を育ててをりにけり
満開の桜のころも知っている作者。桜の花の影と、若葉の頃の影と、そして葉桜の影。それぞれの影の違いを想像させます。

キッズランド

さくらの木夏はわかばのまんかいだ
そうですね。夏はわかばがいつぱいです。元気な木のようにすがみえてきます。

七時まで空が明るい夏の夜
ほんとですねえ。それまではすぐ夜になって暗かったのに、「七時まで…」明るいとはびっくりしますね。地球はおもしろいですね。

メール句会

5月分互選結果

誠哉選

特選

母の日や思い出の杖使い初む
個人えの思いがしみじみと伝わってきます。温かい心の動きに共感を覚え頂きました。

普通選

築一年出入り許され燕の巢
青梅の熟すを待てる皮算用

未摘花選

特選

目くばせに確かめ合える時鳥

以上

季節感溢れる句会ですね。時鳥が身近にありま
せんで故郷の山畑で聴いたのを懐かしく思い出
しました。居合わせた人との情景も詠まれ特選に
しました。

揚舟の輪中家屋や五月間
母の日や思い出の杖使い初む
かきむすめ
東原

普通選

特選

寒き夏肌着あれこれ定まらず
気候不順な年で暑かったり寒かったり着るも
のも定まらず困り果てている様子が句に良く表れ
ています

普通選

踊子草おどり疲れること知らず
初鰹大きな口が卓囲む
公徳
愛

小町選

胸張つて深呼吸して今年竹
竹林の中に佇むと、本当に清しい気持ちにな
り、心が洗われたようになります。作者も竹も深
呼吸をすることで、体に元氣を取り込んでいる様
子が伺えました。

普通選

青梅の熟すを待てる皮算用
築一年出入り許され燕の巢
未摘花
未摘花

岳選

母の日や思い出の杖使い初む
その昔母の日に贈った杖、その杖を使う年齢に
なった、懐かしさと時の流れを感じさせられます

普通選

男手で肌着をたたむ薄暑かな
大盛りの薬味で見えぬ初鰹
誠哉
公徳

特選

傾いて伸びる筍意志のあり
みんなまっすぐに伸びている筍の中に他のもの
とは違った意志を持ち傾いて伸びているものがあ

特選

傾いて伸びる筍意志のあり
みんなまっすぐに伸びている筍の中に他のもの
とは違った意志を持ち傾いて伸びているものがあ

小町選

傾いて伸びる筍意志のあり
みんなまっすぐに伸びている筍の中に他のもの
とは違った意志を持ち傾いて伸びているものがあ

小町選

傾いて伸びる筍意志のあり
みんなまっすぐに伸びている筍の中に他のもの
とは違った意志を持ち傾いて伸びているものがあ

つた。筍にも意志があるのだという感覚が素晴らしい。

普通選

目くばせに確かめ合える時鳥

かきむすめ

公徳選

大盛りの薬味で見えぬ初鯉

公徳

特選

朴の香に包まれ神の棲む木立
朴の花の香に誘われ神が姿を現す木立と読む作者素晴らしいです。!

みさほ

普通選

独り居の物憂き午後や夏さざす
胸張って深呼吸して今年竹

誠哉

空蝉選

特選

大盛の薬味で見えぬ初鯉
初鯉を美味しく食べようと薬味をふんだんに盛った卓が眼に見えるようです。初鯉もかなり大きいのではないかと・・・

公徳

普通選

朴の香に包まれ神の棲む木立
踊子草おどり疲れること知らず

みさほ

美伊選

特選

ときめきと初々しさを谷若葉
平明な表現で、若葉に賭けた想いのようなものを感じさせ、良い句だと思います。

岳

普通選

落ちてゐる蜥蜴の尻尾動きをり
大盛の薬味で見えぬ初鯉

東原

公徳

前橋ホトトギス会 六月例会 六月六日

ぐんま男女共同参画センター

互選結果

伊藤 涼志選

草矢打つふるへし手より真しぐら

久女

緑陰の招きし客となりにけり

すみれ

緑陰の一部分だけ借りてをり

涼美

少しづつ緑陰動き真昼時
利根目がけみんなして打つ草矢かな

房枝

噴水の届かぬ夢を天空に

とし子

緑陰の人を集めてゐる癒し
万緑の中煌めける利根の帯

莉子

弱々し自作の草矢足もとに
草矢の葉選ぶ一つの技ありし

貴子

糸蜻蛉川面の光り強すぎて
糸蜻蛉青味泥浮く池の黙

久女

水音に細波に去る暑さかな
噴水を浴びて石組み息を吹く

みつこ

川風のここは死角や夏帽子
川波に紛れてゆきし草矢かな

房枝

夏蝶の大河の色となりて消ゆ
何といふ長さよ蜘蛛の糸張れる

鈴江

足下の砂を洗ひし水涼し
水輪歪ませあめんぼう動き出す
名知れずに草加はりて風薫る
回想の少年の日へ草矢射る
小指刺す茨の花の白さかな
眩しさに紛れてしまふ糸蜻蛉
水馬姿の失せて影の舞ふ

友子

緑陰に入れば離せる悩み事
緑陰をくすぐる人の喉仏
緑陰に抱き寄せられし空と水
緑陰の日の斑を膝に遊ばせて
水襖で噴水の降ってくる
草矢射る渦巻く河の渦の中

鈴江

相沢 富子選
時折は母に手を振り水遊
回想の少年の日へ草矢射る

千代

門倉 博子選
噴水の求め続けてゐる形

秋野

鈴木 涼美選
流れまで飛べと草矢に言ひ聞かせ
竹市まち子選
浜茄子や口紅変へてみやうかな
田口 莉子選
対岸へ夢を求めて夏の蝶

ま子

竹内 友子選
二つ目の橋を消したる夏霞
唯野 千代選
考へる角度に日傘傾ける
田村みつこ選
薫風やふとまどろみてみし岸边
角田 房枝選
万緑の中煌めける利根の帯
並木 秋野選
緑陰の一部分だけ借りてをり
成田 圭子選
噴水の人喜ばず高さかな
流れまで飛べと草矢に言ひ聞かせ
星野 久女選
吹き上げを操ってゐる風の神
真鍋 貴子選
糸蜻蛉川面の光り強すぎて
吉田 鈴江選
弾きては己が影消すあめんぼう
自句自薦
名知れずに草加はりて風薫る
噴水の人喜ばず高さかな
夏蝶の利根の瀬音の高み迄
糸蜻蛉青味泥浮く池の黙
全身はまだ濡れてゐず水遊
回想の少年の日へ草矢射る
二つ目の橋を消したる夏霞
暴れ出す大噴水の勢ひかな
草矢射る己に向けし矢となりぬ
草矢の葉選ぶ一つの技ありし
湿りなき暑さに心地よき川辺
むらさきの風になりたるカキツバタ
水無月の眩しき空の円しかな
弾きては己が影消すあめんぼう
緑陰の招きし客となりにけり
水底を影が這つてゐるあめんぼう
噴水の求め続けてゐる形

千代

千代

秋野

涼志

とし子

涼志

房枝

房枝

秋野

房枝

久女

秋野

久女

涼美

涼美

貴子

涼志

涼志

涼美

涼美

涼美

涼美

涼美

涼美

涼美

涼美

涼美

涼美

涼美

涼美

涼美

涼美

涼美

涼美

涼美

涼美

涼美

涼美

涼美

涼美

涼美

涼美

涼美

涼美

涼美

松本 和子選

特選

老鶯の感動うすれ遠く聞く

普通選

緑陰の風に安らく足遅し
雑草や木下間にて遅しく
偶然も運も味方に蟻地獄
湧き水の流れ止まりて梅雨を待つ
老鶯の声近からず遠からず
無駄のなき土の装ひ蟻地獄

小山さち子

特選

木苺を喰めば出てくるガキ大将

普通選

紫陽花の水満ち足りてまるくゐる
木苺に凝縮されてゐる山氣
十葉や大木の傘花舞台
病葉のあふるる草の上に散る
さわがにの小流れに生きあいらしく
十葉のふれば放す自己主張

舟山カウ子選

特選

病葉を踏みてその色いとほしむ

普通選

十葉の白さ臉の裏までも
緑陰の風に安らく足遅し
静けさや新緑のびる音聞こえ
沢蟹の小さく息つき水生まる
木苺に凝縮されてゐる山氣
蟻地獄捕へし砂の生きてをり

飯島加津枝選

特選

蟻地獄より天国へ伸ばす幹

普通選

やんはりて風包み込む夏木立
偶然も運も味方に蟻地獄
逃げられてしまひし後の蟻地獄
緑陰の揺れにもリズムありにけり
緑陰を衣にしたる山小径
続と命生みだす山清水

新井 良美選

特選

十葉の清楚に白く散らす星

普通選

蟻地獄捕へし砂の生きてをり
緑陰を衣にしたる山小径
さわがにの小流れに生きあいらしや
病葉を踏みてその色いとほしむ
蜘蛛の囀の払ひて悔ひの過りけり
十葉や大木の傘花舞台

小田 満義選

特選

病葉のあふるる草の上に散る

普通選

緑陰の揺れにもリズムありにけり
無器用に草矢飛ばす手稚子となる
蟻地獄より天国へ伸ばす幹
稜線をずらして過ぎる青葉風
薫風やボタン外して深呼吸
木苺を喰めば出てくるガキ大将

落合 洋治選

特選

蟻地獄捕へし砂の生きてをり

普通選

酸っぱさと苦味後味さくらの実
息を止め気合指先草矢射る
木苺を食べて乙女の顔となる
降る雨をひたすら待ちて花菖蒲
どくだみや只今改名手続中
葉も垂れて梅雨の待たれる今日の晴れ

堀越よし子選

特選

稜線をずらして過ぎる青葉風

普通選

無駄の無き土の装ひ蟻地獄
老鶯の感動うすれ遠く聞く
息を止め気合指先草矢射る
時折は風に素顔の木下閣
木苺を食べて乙女の顔となる
緑陰の風に安らく足遅し

木下 薫選

特選

偶然も運も味方に蟻地獄

普通選

蜘蛛の囀の払ひて悔ひの過ぎにけり
病葉を踏みてその色いとほしむ
分け入りて水掘りあてて沢蟹も
蟻地獄より天国へ伸ばす幹
逃げられてしまひし後の蟻地獄
時折は風に素顔の木下閣
緑陰の魂抜けるペンチかな
紫陽花の水満ちたりてまるくゐる
無駄の無き土の装ひ蟻地獄

和子

特選

紫陽花の水満ちたりてまるくゐる

普通選

身を隠す実梅に生命感じをり
梅雨晴れ間森の大気を入れ替へる
梅もぎてゐるうち空が暗くなる
蟻の列巨大な道になりけり
角度変へ実梅ある場所探し当て
梅の木が軽くなるまで実を拾ふ
見てる間に葉が実に変はり梅をもぐ
出水跡人の勝手の廃棄物
出水跡見るも無惨な河原かな
モノクウの空に四葩の空間を
軽やかな紫陽花の色日をはしく
踏ん張って体重支へ実梅もぐ
もぎたくも届かぬ梅へ思ひよせ
五月間オアシス気分散策す
体力を試す梅もぎ木に登る
残すのも哀れと実梅もぎ尽くす
目の前で落ちる実梅に耀きが
梅落とす地球痛がる音させて
目につけばたいて落ちて実梅かな
実梅もぎ歩幅も軽き帰り道

群馬の森俳句会

第六十二回 平成二十二年六月二十日

互選結果

伊藤 凉志選

志帆 満義 まり子 よし子 凉志 凉志 満義 和子 良美 凉志 祥美 凉代 千律 静子 律子 博子 莉子 秀美 凉美 羊子 静子 利子 秀子 信子 鈴子 祥子 利子 信子

千葉 羊子選

特選

少年に返る木登り実梅く

普通選

本性を剥き出しにして実梅もく
モノク口の空に四葩の空間を
夏蝶の停まりて花のやうにゐる
造反も迷子もありて蟻の列
腕の血の滲みは実梅もく証
雑念を日毎落して沙羅の花

鈴木 涼美選

特選

実梅もく修正出来ぬ枝残し

普通選

ぎたくも届かぬ梅へ思ひよせ
一木にレクリエーション実梅もぎ
残すのも哀れと実梅もぎ俣す
目も口も加勢してゐる実梅もぎ
一時を汗も拭はず熱中し
五月闇オアシス気分散策す

佐藤 静子選

特選

梅の木の軽くなるまで実を拾ふ

普通選

出水跡生活芥草を薙ぐ
梅をもぐいつか無心になつてゐし
枝々を視線さまよふ梅をもぐ
実梅もぎ歩巾も軽き帰り道
モノク口の空に四葩の空間を
造反も迷子もありて蟻の道

唯野 千代選

特選

目も口も加勢してゐる実梅 ぎ

普通選

薫風や修復なりし観音像
実梅もぎ歩巾の軽き帰り道
梅雨晴れ間森の大気を入れ替へる
鷺一羽植田の色を鮮やかに
梅薙ぐ最後の二つに執念を

木屋俳句会

第十八回 六月二十六日

互選結果

伊藤 涼志選

紫陽花の穂の移るひ乙女色
翡翠の水の化身となりて飛ぶ
雨を待つ木立に響く蛙かな
うれしさや小草彩もつ五月晴
翡翠やねらひ定めし瞬時あり
花火屑今は静寂の大地なる
降る雨の波紋広がる夏の午後
大小と湖面の輪にもさみだるる
紫陽花や地球の色を紡ぎをり
うす紅に咲く昼顔の雨に濡れ
竹の皮剥けて吹かれて朝の風
雨蛙うまく間を取り名調子
雨蛙しきりと仲間呼び寄せて
青が揺れ水面の映える七変化
もはや脱ぐものなき竹となりけり
五月雨や消えては出来る湖面の輪
紫陽花の曇りし空に語りかけ
鳴き声に威厳あふれし牛蛙
老鷺や郷愁帯びる森深し
ままならぬ世をまつすぐに今年竹
下草に負けず十葉咲き揃ふ
獲物曳く蟻の大群底力
花菖蒲浮かぶ流れや鯉の稚魚
咲き満ちて列の乱るる花菖蒲
盛り過ぐ哀れを誘ふ花菖蒲
翡翠の技懸命に披露せり
闇に咲き遊びし後の花火屑
沼の奥にぎやかに鳴く雨蛙
花菖蒲反りと高さを競ひをり
五月雨や鏡の池に水玉を

今井 久子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

小林トシ子選

久子

初子

美智子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

トシ子

雨粒に凄みを効かす牛蛙

関口美智子選

老鷺の名残を惜しむ名調子

相馬まさ子選

鳴き声に威厳あふれし牛蛙

高橋 純雄選

紫陽花や地球の色を紡ぎをり

長谷川 孝選

七変化昨日はきのふ今日はけふ

茂木初子選

老鷺や郷愁帯びる森深し

木下 薫選

翡翠を枝へと返す水飛沫

普通選

翡翠の水輪となりて跳ね上がる

雨粒に凄みを効かす牛蛙

点火せぬものも混ざりし花火屑

ままならぬ世をまつすぐに今年竹

もはや脱ぐものなき竹となりけり

花菖蒲反りと高さを競ひをり

闇に咲き遊びし後の花火屑

盛り過ぐ哀れを誘ふ花菖蒲

花火屑今は静寂の大地なる

長光寺句会 六月例会 六月三十日

伊藤 涼志選

合歡の花雨にたたかれ石の上

梅雨晴間水子地蔵ののほり出す

紫陽花の穂耀きて雨上がり

輝ける苔が生き生き梅雨晴間

梅雨晴間葉に水玉の光乗せ

蜘蛛の囀のはかなき光キラキラと

合歡の花天井高く咲き競ふ

擬宝珠咲き玄関前でお出迎へ

木陰にて謙虚に咲ける濃紫陽花

昨夜の雨寺の紫陽花みな美しく

蟻の列ただの静けさとは違ふ

花合歡に透ける風あり空の青

見上げた空へと合歡の花揺れて

夏椿一日に終はる白さかな

涼志

久子

初子

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

髪染めて心の微を払拭す
梅雨晴間物憂げにたつ木立なり
青空や高き梢の合歡の花

麻子

笠原 公子選
特選

高橋かずえ選
特選

公子

万緑の彩つまみつつ風渡る

公子

加勢する蟻に獲物の向き変はる
普通選

涼志

花合歡の淡き紅いる夢のいる
普通選

よしの

薄ら日や花合歡憂ひ引き寄せて

喜代子

七変化寺領無情に咲きて散る
蜘蛛の囀のはかなき光キラキラと
散る姿見せず仕舞ひや苔の花

喜代子
かずえ

雪の下小さき池に石垣に
雨に染む寺領明るき濃紫陽花

喜代子

天辺にがっちり座り合歡の花

喜代子

花合歡に透ける風あり空の青

涼志

昨夜の雨寺の紫陽花みな美しく

史子

蜘蛛の囀の大きく張って孤独なる

喜代子

梅雨晴間水子地蔵ののぼり出す

美恵子

ひそやかに老樹は苔の花纏ふ

麻子

七変化寺領無情に咲きて散る

和世

小林喜代子選
特選

涼志

花合歡に透ける風あり空の青

史子

緑陰に目立つ大輪濃紫

公子

血を吸って腹ふくれたり蚊の飛びぬ

美恵子

半歌仙「水を打つ」の巻
不器用も器用もあらず水を打つ

田部井窓月

万緑の彩つまみつつ風渡る

美恵子

花合歡に透ける風あり空の青

史子

ひときわ映えるあじさいの道

山中佐津喜

蜘蛛の囀の中でゆっくり獲物待ち

美恵子

蜘蛛の囀に透明な時輝けり

涼志

宝くじクラブりばかりらちもなし

伊藤 稜志

加勢する蟻に獲物の向き変はる

涼志

散る姿見せず仕舞ひや苔の花

史子

内ポケットにティッシュユペーパー

田部井窓月

夏椿一日に終はる白さかな

よしの

ゆるやかに高き違へて合歡の花

史子

瑠璃戸越し月を愛でつつ詩を吟じ

中村みゆき

ゆるやかに高き違へて合歡の花

史子

ひそやかに老樹は苔の花纏ふ

麻子

尺八を吹く爽やかな人

ウ

叩くてふ反射神経蚊に遅れ

涼志

蜘蛛の囀の大きく張って孤独なる

喜代子

神前に供う新酒の菰被り

稜志

七変化寺領無情に咲きて散る

喜代子

蟻穴の中の世界に想ひ馳せ

美恵子

転ぶふりしてつい肩を抱く

みゆき

輝ける苔が生き生き梅雨晴間

かずえ

ひそやかに老樹は苔の花纏ふ

麻子

それからが技を出し合う仲となる

みゆき

紫陽花の毳耀きて雨上がり

美恵子

万緑の彩つまみつつ風渡る

公子

無回転ゴールを決めし左足

窓月

ひそやかに老樹は苔の花纏ふ

麻子

叩くてふ反射神経蚊に遅れ

涼志

参院選に動く札束

みゆき

木洩れ日に浮きては消える梅雨の蝶

史子

花合歡の淡き紅いる夢のいる

公子

穴ぐらの熊の親父に尾根の月

窓月

雨に染む寺領明るき濃紫陽花

喜代子

未熟なるものばかり落ち梅雨晴間

涼志

泣きやまぬ子にまじないの術つかい

敏枝

柿沼よしの選

特選

天帝の眼光となる梅雨晴間

普通選

加勢する蟻に獲物の向き変はる

涼志

花合歡の淡き紅いる夢のいる

公子

蟻穴の中の世界に想ひ馳せ

美恵子

ひそやかに老樹は苔の花纏ふ

史子

万緑の彩つまみつつ風渡る

連句作品

半歌仙「遠き山脈」の巻
田に映る遠き山脈緑濃し

孫のお伴で歩む甚平

尺八と二胡のコラボの聞こえて

覚えてうれし絵文字送信

下町を走る都電に昇る月

館林文化会館
陽子

笠原 壺中

三井 静怡

加藤 陽子

鈴木 夕ケ

若林 規夫

熟れた石榴のたわわなる庭

ウ ツアー客利酒過ぎてできあがり

変装をして約束の場所

柔らかな肌に謎めくタトー泛き

睡眠不足のワールドカップ

「はやぶさ」の砂漠に落す玉手箱

ピンピンコロリ釈迦牟尼に請う

月照らす屋台にすする夜鷹蕎麦

夢をむさぼる冬眠の熊

算盤をはじいて叶う船の旅

すべての道はローマに通ず

満開の花は不況を忘れさせ

スカイツリーに霞たなびく

平成二十二年六月二十七日首尾

於 館林文化会館

半歌仙「涼しさや」の巻

涼しさや七百年の楠の影

泉に映る小さき浮雲

ひねもすを蕎麦の手打ちに挑みみて

壺中

規夫

タケ

壺中

規夫

静怡

陽子

静怡

陽子

規夫

タケ

規夫

壺中

規夫

静怡

陽子

静怡

陽子

規夫

短歌行「草笛の」の巻 両吟 9月1日起首

草笛の鳴りし笑顔のこちら向く

シャッターチャンス涼風の中

客を待つ座敷は開けっ放しにて

競売の絵をついに落札

ウ 月見酒一升瓶を廻し呑み

乱れ気になる踊りの浴衣

再会の元彼燃やす紅葉宿

大願成就までの禁煙

親しめる庶民出身官総理

iPAD操作孫に教はり

花陰を乱す水輪に暮る雨

巣立ち間近な羽根の力を

ナオ 嬰兒の無心に見上げ風車

かすり傷にはチチンブイブイ

幽霊を信じた昔なつかしき

喧嘩相手が実は初恋

何もかも捨ててふたりの逃避行

振りむくことの出来ぬ人生

後記

梅雨入りの後、当然とはいいいながらぐずついた

この間群馬の森の句会の時みんな梅もぎを

いたしました。既に大方は先客が落とした後でし

たが、まだ、高いところにはずいぶん残っている

のが目につき、あつちだ、こつちだと云いながら、

ついに、童心に戻って、木登りまで致しま

した。偶々先客が残っていた竹竿があり、出来

る限り枝の先まで登り詰め竹竿を振り廻しながら、

大方の梅は落としたようでした。収穫は全員に行

き渡り、それぞれに、頭の中に処理方法を考えて

いる様子でした。我が家は梅ジャムに致しました。

これだけあれば2、3ヶ月は楽しめます。ヨ

TUKUSI 52号

発行 平成二十二年八月一日

発行人 伊藤 稜 司

発行所 特定非営利活動法人 土筆の会

〒371-0811 前橋市朝倉町三丁目5番地37

電話 027-261-2297

郵便振替口座番号005000392707

http://www.clay-kotobuki.co.jp/tukusi

http://www.clay-kotobuki.co.jp/tukus